



## Data

「昔の雪遊びの楽しさを現代に再生しよう」と1987年12月に雪合戦をイベントとして開発することを決定。88年に世界初の雪合戦ルールが完成。実行委員会には多数の町民ボランティアが参加。

**参加資格**：海外、道外、道内のすべての勤労者およびその家族（中学生以上）

**募集チーム数**：一般の部がおおむね154チーム、レディースの部がおおむね36チームとする（優先順位あり）

**チーム編成**：監督1名（選手を兼任可能）、選手7名、補欠2名の計10名（一般の部は性別制限なし）



●お問合せ先  
昭和新山国際雪合戦実行委員会事務局  
(壮警町経済課) Tel.0142-66-2244

## まちづくりと遺産

実行委員長の堀口一夫さん(54)は「もう少し『遊び心』の要素を加えたい」と指摘。着いたばかりの観光客でも楽しめる「本格的な大会とは別の雪合戦」を模索する。

今年の第14回大会で初めて、一般・レディース双方で道外勢に優勝を奪われたが、関係者は「雪合戦大会が全国に認知されるには喜ばしいこと」と受け止める。「こうなったら国体、そして五輪種目だ」。関係者の夢は膨らむばかりだ。

応募は年を追って増え「スポーツとしての雪合戦」はまたたく間に多くの人に広まった。今年2月の第14回大会は、道内外から1000を超えるチームが応募。25地区の予選を経た19

0チームが昭和新山の山ろく特設グラウンドに集合し、決勝の「センターコート」を目指した。現在は、北海道から大分県まで18の雪合戦連盟を構え、海外でも壮警町の姉妹都市のケミヤルビ市(フィンランド)での「欧州カップ」が8回を数える。小さな町の若者たちのアイデアは「雪まつりに劣らない」一大イベントに成長した。

チームは選手9人(コートに出られるのは7人)と監督1人で編成。7基の雪のシェルター(壁)を設けたコートで雪玉をぶつけ合う。雪玉に当たればアウトで、相手全員を倒すか敵陣のフラッグを奪えば勝ち。選手は専用ヘルメットを着用するが、雪玉の威力で顔面のシールドが破損することもある。

特筆されるのは、その場の雪で勝手に作る雪玉でなく、統一規格の「雪球」を使うこと。「雪球製造器」で直径をそろえ、数も1チーム90個までだ。

雪球の使用ペース、選手の布陣や時間配分などの綿密な組み立てが不可欠。指示を出す監督の役割も大きく、第1回大会で電気関係の職場チームが仕事の専門用語を合図に使い、手の内を読ませない作戦で優勝した。

当初は、決着がつかない場合、残り球が多い方が勝ちで、壁に隠れて球を節約する戦術も横行した。そのルールの廃止や壁の縮小などで、試合が白熱した。